



創刊号

創刊の辞

史料館長 吉里 邦 夫

二国の歴史が過去における国民生活・社会生活の実態を証する各種の史料によつてより一そう明確なものとなることは、いふまでもありません。

文部省では、昭和二十二年度より学界の協力を得て戦後とみに散逸破損のおそれの多くなつた学術史料を収集保存する事業に着手しましたが、昭和二十四年度には史料館を設け、それらの事業を一そう推進することといたしました。

このようにして、史料館は、学術史料の収集整理にあたり、

さらに事業の進展にともない史料の分類整理およびその基本調査、史料に関する啓もう普及等の諸事業を開始して今日にいたつています。

今回、それらの事業活動およびその重要性等を広く御理解いただくため、「史料館報」を公刊するはこびとなり、ここにその第一号を世に送ることとなりました。

この館報を通じまして、当館に対し今後一そうの御支援と御協力を賜わりますようお願いする次第であります。

三九年度事業報告

史料展示会 9月4・9日「日本の民具展」を日本橋白木屋で日本民俗文化研究所と共催。11月9・10日第一四回近世史料展示会として「国絵図・郷帳展」を当館で開催。

史料所在調査 左の地区の各地方調査員に依頼して次の結果を得た。(1月末)。新潟県

(小村武氏) 北蒲原郡安田町 斎藤家文書外6件、北海道

(高倉新一郎氏) 函館税関書

類外10件、石川県(若林喜三郎氏) 鹿島郡住吉神社文書、

山梨県(丸山国雄氏) 中巨摩郡甲西町堀沢家文書外2件、

岐阜県(中野効四郎氏) 岐阜大学郷土博物館所蔵史料。

刊行物 40年3月所蔵史料目録

第十一集(日本実業史博物館

旧蔵史料―錦絵・糸付・地図

・竹森文庫) 発行予定。なお、

当館受贈の民俗資料の収集に

尽力された故渋沢敬三の追悼

記念「日本の民具」第一巻
(慶友社刊) 出版に助力。

研究集会 5月20・22日の日本

図書館協会関東地区公共図書

館研究集会(整理部門)(於

長野県上山田町名月荘) に原

島・大野両館員参加。

7月2・4日の同会全国公共

図書館研究集会(於大阪市日

本生命中之島ビル) に大野参

加。

11月25・27日の全国博物館大

会(於東京通信博物館) 管理

・運営・研究部門に遠藤・大

給・中村三館員参加。

講習会 去る27年以降十回にわ

たつて主催してきた近世史料

取扱講習会は、講習内容及び

受講者の性格などに再検討の

必要を認め、昨年度に続き今

年度も開催を中止した。

このほか、別項新収史料其他の

整理・調査を行ない、年間二〇

人の閲覧者、東方学会其他の見

学者を受付けた。

史料館の当面する問題

文部省は昭和二四年、學術史料の収集・保存・整理のために當館を開設した。現在、約三、四〇万点におよぶ史料が収集・保存され、その一部は整理・分類されて、研究者の利用に供されている。その意味では戦後の急激な史料の散逸・毀滅の時点で、當館が果たした役割は少なからぬものがあつたとみてよい。しかし、戦後二〇年、時代は大きな変化をとげ、その中における當館のもつ意義も、自ら變つてこざるをえない。設立後十数年にして、ようやくここに「史料館報」の創刊号を発刊したのは遅きに失する感が強いが、それは新しい時代に即応するために、當館のもつ悩みと希望をさらけ出し、世論によつて、今後の當館の性格を確定したいからにほかならない。

當館の当面する第一の問題は、収集活動の限界である。最近當館の収集の大部分が、古書店などいしく紙回收業者の店頭より行なわれている。それは當館の史料収集予算の絶対的不足と、散逸する現地史料の調査のための旅費が殆んど無いということが原因の一つである。けれども実は、過去の當館の史料収集方法に対する学界・地方の批判を率直に受け入れ、史料は現地に於いて保存・公開され、中央に集めべきではないとの基本的考えに立ち、自己批判した結果によるのである。

右の事情を認識すれば、當館の性格・事業に根本的な再検討を加えざるをえない。問題の第二は當館の事業の変更である。ここ二、三年、私たちは當館の運営について検討を進めているが、運営規程はまだ制定、施行するに至っていない。しかし、今後の當館の事業として私たちが考えた案があるのと、以下に列記してみると、(1)史料の基礎的な調査、(2)史料の収集、ないし史料の写真複写による収集、(3)史料に関する基本的研究、(4)史料の整理・保存、(5)史料の公開・複写サービス、(6)所蔵史料目録・史料所在目録・研究報告・重要史料等の刊行、(7)史料に関する啓発(講演会・展示会等の開催)、(8)史料取扱者の研修(史料取扱講習会の開催)、(9)史料保存のための助言、(10)関係機関との連絡、刊行物・情報等の交換、広報活動、となつており、従来の事業に対して、新しいものを付加している。

第三の問題は、史料の統一的分類、整理法の確定と、近世古文書類、文献学的研究、制度史・統計的研究の必要性が緊急であることと、當館はこれらの研究を学界・図書館界とともに遂行していきたいと思つてゐる。

第四の問題は、史料の公開体制の整備である。當館の保存史料のうち約半数は未整理であり、その解決にせまられている。しかも非公開をたて前とし、出納員・閲覧施設も皆無である。根本的には人員・予算の獲得、施設設備の拡大(保存のための設備も含めて)、その実現のための所轄機関への独立が不可欠である。しかし、当面は保存史料の所在のみでも明確に提示する責任があるので、所蔵史料一覧表を収載した。

なお、最近日本史資料センター設立の要望があるのも、史料の保存と平等な公開体制が一般に欠除しているからにほかならない。私たち所蔵機関に属する者も、保存・公開体制をはばむ障壁を排除するよう努力したいと思ふ。

民具收藏庫の現況と問題点

当館は昭和三十七年に新館を建設し、ここに旧民族学博物館所蔵品約四万七千点と旧日本実業史博物館所蔵品約四千七百点の寄贈を受けて収蔵している。これらの収蔵品の整理・分類・管理は、研究職員三名がそれぞれの専門分野に近いものを、(1)旧実業史博物館関係の近世の町人資料・近代の風俗資料、(2)旧民族学博物館関係の日本農山漁村の生活用具、(3)同じく外国諸民族の生活用具資料の三つに分けて担当している。

整理・分類の業務については、基本カード作成を第一とし、次に資料番号記入、台帳、所在簿の作成を行なっている。ここで問題は、資料の識別に必要な写真の撮影が予算的にも技術的にも制約されているため、相当長期間を見込まねばならないことである。第二には旧所蔵者から引継いだ目録の資料名が

採集者により不統一であり、なかには全く用途を誤認した名称や誤った使用地もあり、その訂正には物質文化に関する基本研究が必要とされる。とくに今日使用されていない用具の破損修復の場合は勿論であるがその使用方法・形態・材質・製作技術にわたる基礎的な資料が当然必要となる。それと同時に日本の地方文化や外国の諸民族の文化の中におけるこれら収集資料の位置づけとか歴史の変遷の過程を明らかにしていく一連の研究も附随すべきものと考えている。しかし、収蔵庫(新館)は単なる保管機関であるという、行政上の考え方のゆえに、以上に記した基礎的研究をふまえた業務はまだ公に認められるには至っていない現況である。

・工芸品と比較した場合、生活用具は特定の地域に広く見出せることや、それ自身が觀賞の目的でないことなどから一般には軽視されがちである。しかし当館資料の中にも製作者の創意・工夫を発見することも少なくない。そればかりかある時期、ある地域の文化要素として収集品は多数の類似品から残された貴重な標本としての意義のあることも今後は広く展示会を通じて啓蒙する計画である。

保存管理はここ二年間もつばら収蔵を目的とした棚・多運多列の引出しの設備に迫われたが、また計画の半分も実現していない。このほか、湿度管制・防虫(貸出しも多いのでできれば毎年定期的にメチプロン消毒を実施したい)、耐震防火の設備も必要であるが、来年度は衣服の保存について最適の方法を計画したい。

最後に、警備の人員が皆無なので、資料の常時一般公開ができないが、年一回の展示会を開

いていくらかでも広く研究者・一般の利用に役立ちたいと念願している。

(4 頁下段より続く)

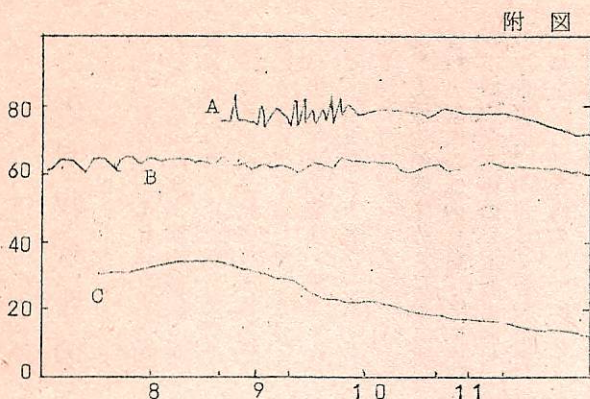
の分類法、目録規則を早急に確定するのは極めて困難であるが、一般図書と別扱いにし、分類は家わけ、村わけを先行させ、その中は独自の分類法(十進分類形式の採否は別に)の確定が必要なこと、NORRを近世史料にも利用できるよう改訂すること、印刷目録(縦型)を作成すること、史料の原型を尊重すること、などの意見一致をみた。

なお、私たちも図書館人の考え方を十分に理解し、その整理・保存法を参考にすべきである。それだけでなく、史料の整理法に対し、当館ないし近世庶民史料調査委員会が与えた影響が極めて大きく、また批判も多いという事実を率直に認識し、その批判に応えていくことが、今後の私たちの課題である。

湿度管制

新館収蔵庫は三層で、各一五〇、一〇〇平方メートルの広さをもつ。各層は厚いコンクリの壁や鉄扉で外界から遮断することができる。室内には殺菌灯もある。

その湿度を約半年間測定し



たところ、例えば、附図A線のように、かなり変動があり、かつ、多湿傾向を有することがわかった。

多湿はかびと、キクイムシなどの虫害の味方である。そこで、国立文化財研究所保存科学部岩崎友吉先生の御教示を拝き、除湿機を備えた。すなわち、日立の電気除湿機RD二〇〇三型八台によつて除湿したところ、附図B線のごとく、多湿期における湿度の変動をおさえ、その幅を毎日2%以下にし、かつ、湿度を一五%低下せしめることができた。因みに附図C線は温度の推移を示す。

なお、虫害防除のため、年一回、全館密封の上、東洋燻蒸株式会社によつて、メチブロン二の投与を行った。

民族資料の材質は多岐にわたる。それぞれに応じた保存方法が開発されねばならない。長期停電時の処理も問題になる。近代的収蔵庫における保存方法はなお多くの問題を残す。

近世史料の整理について

公共図書館研究会(整理部門)に出講して

日本図書館協会公共図書館部会が今年度とくに「近世史料の整理」というテーマを掲げた理由は、郷土の資料委員会を中心に、郷土の資料収集運動の一環として収集された近世史料が、統一的整理法が確立していないため、殆んど放置され、利用されていない実情を打開し、全国的な研究討議に基づく、新しい近世史料の整理法作成の一段階を画せうとするものであつた。

研究会は、地区別討議を行なつた上、全国集会で討議する方法をとつた。関東地区ならびに全国の研究会は、ともに同一の要項に基づいて実施されたので、両者の内容を一括して、以下に記述する。

討議の前提として、(1)史料の性質と種類について、(2)史料の存在の仕方、を当館職員が講義し、ついで、(1)史料整理の基本

的な考え方はどうあるべきか、(2)史料の分類はどうしたらよいか、(3)史料目録のとり方はどうしたらよいか、(4)史料の管理(装備・配列・保管等)について、(5)マイクロによる史料の整理について、(6)その他、の順で討議を行なつた。

文書館が僅少な現在、現実には史料を収集・保存し、公開してきた公共図書館の役割は大きい。しかし、近世史料を郷土資料の一つと考えるため、どうしても図書と同一視しようという意見が強く、従つて、分類はNDC、カード記載はNOR、分類と配架は一致、ということになり易い。また史料取扱の専門職員が少なく、統一的整理法もないためか、私たちの考え方とくい違う面も少なくない。

熱心な討議の結果、近世史料(以下3頁下段へ続く)

館内での研究活動

収蔵史料の整理・分類を本業とする本館では、館員の館内外での研究活動や、それを基礎にした共同研究体制を伸ばして行くことはなかなか困難なのが現状である。しかし、史料を蒐集し、それを整理・分類することのどの一つをとつても、利用者の要望に充分にこたえるためには、当館としてつねに学界の動向なり研究史の現状なりを適確に把握しておくこと、そのために館員の研究活動を伸ばして行くことが必要である。さいわいに、そうした問題点が、館内外の関係者の努力によつて、近時、少しずつ解決される緒口が出て来ていることは喜ばしい。その主なものは、次の通りである。

◇機関研究

昭和三九・四〇両年度にわたる文部省科学研究費(機関研究)の交付を得て「近世城下町史料の基礎的研究」(担当者遠藤武)

をテーマとする共同研究が、三九年度から開始された(研究費総額二〇〇万円予定)。これは、全国主要城下町の未刊史料を、マイクロフィルムに撮影することが当面の課題である。史料選択の観点及び分担課題は、藩財政(協力者所三男)・城下町制度機構(浅井潤子)・家臣団(鎌田永吉)・商業(鶴岡実枝子)・交通運輸(藤村潤一郎)・手工業と生産技術(大野瑞男)・学芸思想(原島陽一)・民俗(中村俊亀智)・家族(大給近達)の諸分野にわたる。三九年度は、糸魚川・甲府・鳥取・上田の調査を進めており、かなりの成果をおさめている。四〇年度は、糸魚川・上田の第二次調査の外に、金沢・会津・岡山を調査、なお四一年度も交付が認められれば熊本・宇和島の調査を予定している。この成果と問題点は共同研究を通じて、学界

に公開して行きたい。なお現地調査に際しては、関係各位から大変暖かいご配慮とご指導を賜った。紙上をかりて厚く御礼を申し上げる。来年度以降も引き続き変らぬご鞭撻とご協力をお願いしたい。

◇各個研究

昭和三九年度は「近世初期大名財政の研究」(鎌田永吉)について研究費(六万円)をうけた。

◇定例研究会

- 38・4・19 カミュラ族の生活 大給 近達
- 38・6・27 江戸時代の農民 鎌田 永吉
- 38・9・26 服飾上よりみた遠藤 武
- 38・10・13 近世風俗 近世における鉄の流通 大野 瑞男
- 38・12・10 近世の飛脚問屋 藤村潤一郎
- 39・4・23 見立絵について 原島 陽一
- 39・7・3 大阪干鰯仲買仲間について 鶴岡実枝子

- 39・9・29 日本人の起源の問題 中村俊亀智
- 39・12・2 名古屋商人の性格 浅井 潤子
- 40・3 在地本々による幕府用材の生産仕方 所 三男

昭和三十八年以降の館内研究発表会は右の通りである。来年度以降は、館外の研究者とも積極的に交流して行くために、さらに内容を充実させて行く計画である。

◇右の定例研究発表会のほかに、近時、史料館業務の本体である史料の整理と分類方法について、過去の成果の上に立つてその根本的再検討を始めている。まだ共同討議は緒にいたばかりであるが、多くの研究者の意見や他の関係機関の実態をも吸収するために、図書館協会の研究集会に館員が積極的に参加するなどして、分類・整理の研究を進めている。

所藏史料一覽概表(一)

但蒐藏年度順、※印
は点数百点以下の少
数史料、○印数字は
既刊目録集数

越前史料 松平春嶽公記念文庫旧藏藩史編纂資料 謄影写本
陸奥国弘前津輕家文書(弘前藩主)

※信濃国伊奈郡島田村森本家文書(庄屋)

※上総国山辺郡清名幸谷村飯高家文書(名主)

※陸中国下関伊那嶽ヶ崎村佐々木家文書(宮古給人・地主)

甲斐国巨摩郡青柳村秋山家文書(庄屋)

信濃国更級郡田野口村小林家文書(松代藩給人・地主)

信濃国伊奈郡福島村片桐家文書(庄屋)

信濃国伊奈郡加々須村勝家文書(名主)

出羽国雄勝郡湯沢佐竹南家文書(久保田藩湯沢所預り)

三条西家文書(公卿)

※武藤鉄城氏蒐集史料 出羽国仙北郡角館周辺農村及給人文書

信濃国筑摩郡桐原村文書

三河国額田郡深溝村八田家文書(旗本板倉氏深溝陣屋代官)

※三河国額田・碧海郡村々年貢免状

※尾張国海西郡与藏山・平島・松名新田村年貢免状

美濃国厚見郡加納宿汲田家文書(宿年寄・魚問屋)

※尾張国熱田城屋町岡本家文書(地主)

美濃国羽栗郡下印食村渡辺家文書(庄屋)

美濃国武儀郡山田村長田家文書(庄屋)

※伊勢国桑名郡木曾岬村文書

※尾張国海西郡葛木村渡辺家文書(庄屋)

※周防国吉敷郡仁保上郷・中郷村絵図

※長門国豊浦郡清末毛利家文書(清末藩主)

信濃国伊奈郡島田村松村家文書(庄家)

信濃国伊奈郡柿野沢村牧之内家文書(庄屋)

信濃国伊奈郡柿野沢村宮内家文書(庄屋)

信濃国伊奈郡葛島村下平家文書(庄屋)

② 遠江国引佐郡賀賀宿中村家文書(本陣・賀賀町井上村庄屋)

③ 祭魚洞文庫旧藏水産史料他

⑩ 武蔵国幡羅郡永井太田村掛川家文書(旗本松崎氏知行分名主)

伊豆国君沢郡長浜村大川家文書(名主・津元)

伊豫国伊豫郡上野村玉井家文書(庄屋)

① 遠江国佐野郡桑地村加茂家文書(庄屋)

尾張国海西郡森津新田武田家文書(地主)

※尾張国海西郡甚目寺村吉川家文書(割元)

相模国大住郡土屋村原家文書(旗本窪田氏知行分名主)

出羽国秋田郡大館武茂家文書(久保田藩士)

① 遠江国榛原郡嶋村山田家文書(庄屋)

④ 出雲国松江松平家文書(松江藩主)

甲斐国巨摩郡今福村文書

出羽国秋田郡北比内片山村谷地田家文書(肝煎)

出羽国秋田郡大館岡本家文書(久保田藩士)

出羽国秋田郡南比内二井田村一関家文書(肝煎)

愛知県庁文書

尾張国海西郡神戸新田神戸家文書(商人地主)

浜村榮三郎氏蒐集史料

三井高維氏蒐集商業史料

信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書(名主)

出羽国秋田郡大葛金山荒谷家文書(金山支配人)

出羽國秋田郡久保田小貴家文書(久保田藩士)

尾張國知多郡半田村中埜家文書(庄屋)

出羽國秋田郡大館中田家文書(地主)

出羽國秋田郡大館栗森家文書(商・地主)

※定所雜錄 一七冊

信濃國埴科郡松代真田家文書(松代藩主)

清水谷家文書(公卿)

播磨國加古郡下西条村大西家文書(庄屋)

下總國相馬郡藤代村横瀬家文書(名主・本陣)

出羽國平鹿郡角間川村本郷家文書(地主・商)

甲斐國巨摩郡穴山村生山家文書(神官)

出羽國田川郡大山村大

中斐國巨摩郡西条村野呂瀬家文書(名主)

※九店仲間差配廻給文書

※武藏國荏原郡品川領檢地帳

撰津國大阪加嶋屋長田家文書(両替商)

※駕輿丁史料(左右衛府兄部・沙汰人家)

⑤江戸金吹町播磨屋中井家記錄(両替商)

※江戸奈良茂家文書(材木商)

⑥撰津國大阪塩町小橋屋平井家文書(呉服・両替商)

※撰津國兵庫北風家記錄(諸問屋年寄)

※飛鳥井雅豎日記 元禄二・三・宝永八年

※袖岡玄蕃家記(藏人所衆公用日記) 文化一三・弘化四年

⑦武藏國入間郡川越横田家文書(町年寄・商)

⑧駿河國富士郡岩本村文書(富士川渡船場村)

京都臨濟宗大本山天竜寺塔頭臨川寺文書

※松坂雜錄(三井高遂氏蒐集史料)

※伊勢國飯高郡松坂本町山城屋水谷家文書(飛騨問屋)

①武藏國幡羅郡下奈良村吉田家文書(旗本植村氏知行分名主)

②阿波國德島蜂須賀家文書(德島藩主)

能登國鳳至郡中居村田家文書(鐔物師)

※肥後藩南関番所手形 貼込三帖

※肥前國略繪圖 二舖

武藏國大里郡大麻生村古沢家文書(名主)

⑤甲斐國山梨郡下井尻村依田家文書(地主)

※美濃國不破郡岩手村竹中家文書(旗本)

※撰津國東成郡天王寺村文書

※上總國天羽郡萩生村齊藤家文書(旗方名主・網主)

③伊勢國飯野郡射和村大黒屋富山家文書(呉服・両替商)

諸札書(有職故実書)

常陸國行方郡牛堀村須田家文書(庄屋)

越後國頸城郡岩手村佐藤家文書(大肝煎・庄屋)

信濃國埴科郡松代町八田家文書(町年寄・商)

陸奥國白川郡栃本村根本家文書(高田領触元大庄屋)

⑦出羽國村山郡山家村山口家文書(名主)

陸奥國白川郡棚倉馬場大普山近津大明神別当不動院文書

磐城國石川郡大畑村文書(庄屋角田家他金沢春友氏蒐集史料)

出雲國大原郡大東村木村家文書(地主)

信濃國佐久郡御影新田柏木家文書(開荒人)

紀伊國古文書 本居文庫旧藏(本居内遠探訪史料)

※聽水閣蒐集古文書(三井高堅氏蒐集史料)

聽水閣蒐集武鑑類

新収史料紹介

出羽国雄勝郡湯沢町小川家文書
寛政以降の久保田藩湯沢の蔵

元(屋号は本庄屋)業務に関する史料を主とし、他に硫黄・生糸・米・苧等の商取引、及び質屋関係を含む江戸時代後期の商人地主史料。(現秋田県湯沢市、数量一三〇冊、一九六通、二七五綴、一卷、一括)

肥後細川家系譜類 細川家譜

・綿考輯録等の編纂書七三冊。
家譜は明治六年藩館譜補正のための録上控本。綿考輯録は細川藤孝・光尚四代の遺文・逸事を挿入した伝記で、安永七年の編。他に内容的には綿考輯録の記事と重複するが、纏りの相統する慶安迄の藩主の事績を録した藩譜便覧(天保三年編)等。

信濃国水内郡五荷村水野家文書

慶安以降の換地水帳(写)、享保一四年五人組改帳等を初め、概ね化政期以降の貢租関係帳簿を主とする飯山領五荷村の村方史料と、金融・小作・米売買・

酒造等、江戸時代後期から明治初年に至る自家経営史料より成る(現長野県下水内郡太田村豊田、数量約八八〇冊、三一綴、二七通)

甲州山梨郡下井尻村井尻家文書

昭和三五年度購入の同家文書の追加分。天領村の名主文書であるが、内容的には由緒書その他、同家の浪人身分として作成された史料が最も多く、享和以降の手帳(日記覚書)の類が比較的纏つてゐる。(現山梨市下井尻、数量一一五冊、三帖、一八一通、二二綴、二巻、五袋)

遠江国豊田郡久保村秋鹿家文書
遠江国府八幡宮社家文書とし

て、社領寄進状を初め、社地久保村の土地・租税及び給地百姓の出入等に関する史料が大半を占めるが、他に元禄六年以前中泉代官たりし同家の元和五年池田川西御代官所高帳を初めとする代官仕置に関する書付類若干を含む(現磐田市久保、数量一二九冊、一四九通、三括)

新館新収資料

新館民具の収集は予算皆無のため、寄贈によること以外は全く行われていない現状である。村落・都市のいかんを問わず、生活が急速に改善され、都市的な生活用具が急激に浸透するようになって、在来固有の生活用具は多く絶滅しようとしているが、現在の状況では、貴重な資料がみすみす失われていくのを見逃さねばならない。過去二年間、新館へ収められた資料は主として次の通り。

カヌー(一点、権一組とも)

西イリアンパ

クワン産業株式会社寄贈

斧(一点) ムンダ族(杉山晃一氏寄贈)

氏寄贈

樹皮布(一点) トンが島(青柳真智子氏寄贈)

真智子氏寄贈)

扇(三点) 魚網(一点) 笛(一点) 釜(一点) 和田一雄氏寄贈

◎編集後記◎

所蔵史料一覧は、はなはだ簡略不備を承知の上で、あえて、連載することにした。各文書の概要紹介は逐次行ないたいと思つてゐる。

なお、当館ならびに本報に対する御意見、御希望をおよせ願えればと思う。

市町村合併の際の廃棄書類は、いたずらに断絶処分され、まさに、戦後第二次の史料散逸期をむかへてゐる。これが速かなる保存のための立法措置が切望される。

情報管理、保管技術の発達はいちじるしい。不十分ながら、各種の実験データを紹介してゆきたい。

史料館報 創刊号

昭和四〇年三月三十一日

文部省史料館発行

東京都品川区豊町一の一六の一〇

本館七八一・四一〇六

新館七八三・二四四九

印刷所 三 響 社

電 二九一・四九七四一五